

水曜通信 5

東北学院宗教センター編

2021年
1月

LIFE

LIGHT

LOVE

「いついかなる場合にも対処する秘訣」

2021年の新しい年を迎えました。昨年初頭から始まった新型コロナウイルス感染症を今年も予防しながら過ごします。早く収束しないかと焦り勝ちですが、むしろこの制約下で、使える持ち駒が限定される分だけ、一手一手無駄のない、集中した取り組みが可能になります。

「無いものを嘆かず、与えられているものを存分に使う」とは昨今の賢人たちが示唆する、よく生きる秘訣です。アルフレッド・アドラー、ビクトール・フランクルや、日本人では三浦綾子が語り、渡辺和子の『おかれた場所で咲きなさい』もそれを告げます。

新約聖書ではパウロが、「いついかなる場合にも対処する秘訣」を授かっているとフィリピの信徒への手紙第4章12節で語っていますが、それは「自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えた」からであると言っています。

新しい年も制約の多い年となるでしょうが、制限下で、与えられているものを存分に使って、満足できる十分な取り組みが出来るよう、鋭意努力したいものです。

宗教センター主任(宗教部長) 野村 信



東北学院榴ヶ岡高等学校
昇降ローステンドグラス



次回：第39回水曜公開礼拝(公開オンライン礼拝) 1月27日配信予定

学校法人東北学院ホームページまたは右のQRコードからご覧いただけます。

【第1部 礼拝】 説教：田島 卓(本学文学部講師)
奏楽：渡辺 真理(礼拝オルガニスト)

【第2部 音楽による賛美】
演奏：渡辺 真理



第38回 水曜公開礼拝報告（説教：松本 宣郎、奏楽：菅原 淑子）

2020年12月16日（水） 公開オンライン礼拝

讃美歌：98番「あめにはさかえ」
旧約聖書：イザヤ書 9章1-6節
新約聖書：ルカによる福音書1章26-29節
説教：「祈りて待つ」
讃美歌：103番「まぎびとひつじを」
頌栄：542番「よをこそりて」



【説教要旨】

洗礼を受けたころ、「聖書は旧約から新約まで、通して読め」と教えられた。大学生になって、少し深く読めるようになったとき、「旧約」がそこかしこで救い主の到来と罪のない者が人々の罪の身代わりとなる出来事を予言していることを知った。今日のイザヤ書9章、そしてことに53章がそうであった。苦難の歴史をたどったイスラエルの民は、旧約に記された神のご計画を信じ、救いと平和の実現をずっと祈って待ったのである。そして時が来てナザレのマリアに天使のお告げがあった。神はしばしば小さな者に目を注ぎ、狭い所、細い道を広げて大きなことをなさる。ベツレヘムに生まれた小さな御子が、イスラエルだけでなく全人類の救いとなる、そのような大いなる奇跡をなさったのである。

今年のアドヴェントを、特に私たちは救いと平和の到来を信じ、祈って過ごしたい。

（元理事長・院長・学長 松本 宣郎）

前奏：J.S.Bach（1685-1750）「来たれ異邦人の救い主よ」
BWV659

この作品は、バッハがヴァイマル時代に手掛けられ、ライプツィヒ時代にバッハ自身によって改定されたことから、ライプツィヒコラール集と呼ばれる。マルティン・ルターによる待降節のコラールに基づいている。

（礼拝オルガニスト 菅原 淑子）



礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏・奏楽：今井奈緒子、独唱：中川郁太郎）



1. J.S.バッハ オルガン編曲「わが魂、主をあがめ」BWV648
2. J.S.バッハ 《マニフィカト》よりバスのアリア
3. J.S.バッハ マニフィカトによるフーガ「わが魂、主をあがめ」BWV733

ルカによる福音書第1章46～55節「わたしの魂は主をあがめ」に始まるマニフィカトは、マリアが思いもかけなかった受胎告知を受け入れ、全身全霊で神に祈り賛美する歌です。マニフィカトはドイツ語のコラール「Meine Seele erhebt den Herren」となり、数多くの声楽・器楽作品が生まれました。バッハの教会カンタータBWV10は全編このコラール編曲で構成されています。第5曲は、通奏低音に支えられたアルトとテノールの二

重唱にトランペットとオーボエがコラールを奏でますが、バッハ自身がこの曲をオルガンで独りで演奏できるように編曲したのが冒頭の作品です。バッハにはラテン語で作曲した有名な《マニフィカト》（BWV243）もあり、その第5曲はやはり通奏低音に支えられたバスのアリアで「わたしに大いなることをなし給うたのだ、力ある者が」の歌詞の通り、力強い神の歩みを象徴するような音楽です。このアリアを2曲目に演奏し、終りの曲はオルガノ・ブレノで演奏するマニフィカト・フーガです。手鍵盤上の忙しいパッセージを締めくくるように、ペダル鍵盤に重厚なコラール旋律が現れて終わります。

（大学オルガニスト 今井 奈緒子、特任准教授 中川 郁太郎）



東北学院の草創期 (4) 「いつ?」

東北学院が創立記念日を5月15日と定めたのは、1908(明治41)年です。4月30日に開かれた理事会で決議されたことが記録されています。しかし、たびたび引用している『東北文学』(創立25周年記念特別号、1911年)には、「明治十九年六月を以て開校せられたる我が仙臺神学校」と記されており、また『東北学院七十年史』(1959年)は、「春から準備が進められ、実際の授業を開始したのは六月に入ってからであつたといわれている」と記しています。

しかし、創立された1886年4月30日付のホーイの手紙は、「四人の青年たちが神学を学びたいと言っている」ことを伝え、さらに7月30日付の手紙には「五月以来、四人が私のもとで勉強を始め、まもなくもう二名が加わる」と明記されています。

Four young men of considerable education wish to study theology now. They have been Christians for a number of years. If we go into this school they will be ours.

Since May four young men have been studying for evangelistic work under Bro. Hoy's direction; two more will soon join the class.

この新たな資料の発見により、『東北学院百年史』は、「六月創設を語る必要はもはやない」と断言し、理事会が5月を創立記念と決議した時には「創立当時の想憶がまだ生きていたとも考えられる」と付け加えています。むしろ実際の授業は、5月初旬から始まっていたとも考えられます。

(東北学院史資料センター 日野 哲)

4月30日付の手紙は、ドイツ改革派教会の機関誌『メッセンジャー』に掲載されたものです。

一 建築との対話：礼拝堂建築調査の現場から (11) 一

1930(昭和5)年の10月上旬、東北学院は建設会社8社に、完成した仕様書と図面を添えて、礼拝堂の建設費の見積りを依頼する書簡を送っています。依頼先は、大倉土木会社(現在の大成建設)、石井組、清水組(現在の清水建設)、鴻池組、竹中工務店、J.W.RUST Engineer、大林組、そして本館の施工を請け負った仁田工務店でした。当時最新の技術であった鉄筋コンクリート造の建築を施工できる会社は限られていました。8社のうち仙台に事業所(支店)があったのは石井組と仁田工務店の2社のみで、他の6社は、東京や横浜にしき事業所のない企業でした。

10月15日に8社の見積りが揃います(右図)。設備工事を除く建築本体工事の金額で見ると、最も低価の見積りを出したのは横浜のJ. W. RUST Engineerで88,865円。逆に最も高価だったのは大倉土木会社で141,555円でした。ちなみに、現在20万円程の銀行員の初任給が当時(昭和5年)75円程、現在5600円/g程の金相場が当時(昭和5年)1.36円/g程だったようです。そこで仮に現代の価格を当時の3500倍として概算すれば、当時10万円の建設費は、現代の3.5億円に相当します(ただし、当時と現代とは建設労働者に対する人件費も大きく異なります。これを加味すれば、この金額は更に上方修正されるでしょう)。礼拝堂の建設工事の規模がうかがわれます。

(工学部 崎山 俊雄)

October 15th, 1930.

1 QUARTER WITHDRO
FROM
TRUST SAVINGS BANK

Contractor	Construction	Framing & Electric	Total cost
1. Obara & Co.	¥ 141,550.00	¥ 7,590.00	¥ 149,140.00
2. Ishii	100,000.00	5,300.00	105,300.00
3. Mizuno	120,750.00	10,050.00	130,800.00
4. Masuda *	130,500.00	7,800.00	138,300.00
5. Takekoshi *	127,700.00	8,500.00	136,200.00
6. Ito Kumei	91,860.00	8,400.00	100,260.00
7. Imai	88,865.00	6,950.00	95,815.00
8. Ohbayashi	135,800.00	10,000.00	145,800.00

141,555円
88,865円
100,000円
120,750円
130,500円
127,700円
91,860円
88,865円
135,800円

7,590円
5,300円
10,050円
7,800円
8,500円
8,400円
6,950円
10,000円

149,140円
105,300円
130,800円
138,300円
136,200円
100,260円
95,815円
145,800円

141,555円
88,865円
100,000円
120,750円
130,500円
127,700円
91,860円
88,865円
135,800円

モーガンのメモが残る各社見積額一覧
(1930年10月15日付)

「ランカスター神学校の思い出」(3)「ランカスターのアメリカン・ダイナー」

アメリカの映画を見ているとダイナーと呼ばれるレトロなレストランで食事しているシーンが登場することがあります。そのノスタルジックな雰囲気と憧れた経験がある方も少なくないのではないのでしょうか。

ランカスター周辺にもいくつかダイナーが存在していますが、おすすめるはルート 30 (リンカーン・ハイウェイ) 沿いにある、その名もずばり Route 30 Diner です。ランカスターのダウンタウンから自動車ですら20分ほど東に行ったところにあります。1950～60年代にタイムスリップしたかのようなダイナーでは、アメリカ伝統のバンケーキやハンガーガーを堪能できます。



またダイナー周辺は、ペンシルヴァニアン・ダッチ(ダッチはドイツ系移民を指す)が多い地域であり、17世紀ドイツの生活様式を守り続けているアーミッシュの人々の家も広大な農地の中に点在しています。そのためルート30沿いでは、たくさんの自動車や大型のトレーラーが行きかう中、アーミッシュの運転するバギーが走っているのを見ることが出来ます。17世紀のアーミッシュと20世紀半ばのダイナーが共存するルート30にも、アメリカ文化の多様性が表れていると言えるでしょう。

文学部 藤野 雄大

美術による賛美 (2)



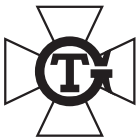
ハインリヒ・ホフマン『ゲッセマネのキリスト』
キャンバスに油彩 1890年制作
リバーサイド・チャーチにて 2015年8月28日撮影

この『ゲッセマネのキリスト』の絵は、ドイツのダルムシュタット生まれの画家ハインリヒ・ホフマン(Heinrich Hofmann 1824-1911)の1890年の作。1932年にはニューヨークの富豪ロックフェラーが購入してリバーサイド・チャーチに寄贈しました。

複製は早くから知られ、開国日本の写真術のパイオニア下岡蓮杖(1823-1914)が早くも1899年に日本画で模写しています。下岡蓮杖は、押川先生受洗の2年後の1874年に同じ横浜海岸教会でジェイムズ・バラより受洗しています。

ホフマンのこの絵はプロテスタントを代表する宗教画としてその後もよく知られ、年配の方々には、昔、日曜学校で配られたカードなどで見覚えがあるでしょう、学院の泉礼拝堂にも多賀城礼拝堂にも立派に額装された写真複製が仙台のキリスト教書店から贈られています。

この図柄はアメリカではステンドグラスに、ロシアでも帝政時代にイコンにコピーされていたに宗派を超えて知られていたのです。日本の唯一のイコン画家山下りんもコピーしています。(文学部 鐸木 道剛)



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」 第5号

2021年1月12日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

発行責任者: 宗教センター主任 野村信

編集協力者: 鐸木道剛

東北学院宗教センター TEL: 022-264-6558

Email: c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp